

## [成果情報名]ビワ「BN21号」の寒害軽減のための未着房枝の切返し時期と摘蕾方法

[要約]ビワ「BN21号」の凍死果率を軽減し、着房率を確保するためには、未着房枝の先端を5月中～下旬に切返す必要がある。さらに、上部1/2摘蕾を行う事で幼果の凍死果実率が抑制でき成熟果実は大果となる。

[キーワード]ビワ、BN21号、切返し、凍死果率、寒害

[担当]長崎県農林技術開発センター・果樹・茶研究部門・ビワ落葉果樹研究室

[連絡先](代表)0957-55-8740

[区分]果樹

[分類]指導

[作成年度]2018年度

---

### [背景・ねらい]

ビワ「BN21号」は、「長崎早生」より満開期が遅いため、露地栽培では幼果が低温の影響を受けにくく、「長崎早生」より耐寒性(生存率)の高いビワ新品種であるが、幼果そのものが低温に強いわけではないため、安定生産のためには品種の特性を活かせる栽培管理が重要となる。そこで、適正着房数の確保のための枝先の切返し処理時期の検討、および低温による幼果の凍死果率が摘蕾処理方法により調節が可能であるかを検討する。

### [成果の内容・特徴]

1. ビワ「BN21号」の寒害低減を目的とした未着房枝の切返し処理は、6月では2から3割程度の着房しか認められないが、それ以前の5月中下旬までに切返す場合は概ね90%以上の着房が確保できる(表1)。
2. 着房した花房の生育に差は認められないが、12月中旬における未開花率は無処理で低く、切返し時期が遅くなるほど高い傾向を示す(表1)。
3. 処理の違いによる幼果の横径に差は無いが、凍死果率は無処理で高く切返し処理で低い傾向を示す(表1)。
4. 枝長に処理の違いによる差は認められないが、葉数は無処理で多く切返し処理時期が遅くなるほど少なくなる傾向を示す(表1)。
5. 上部1/2摘蕾処理では幼果の凍死果実率は2から3割程度発生するものの、普通摘蕾処理に比べ凍死果実率は低い(表2)。
6. 摘蕾処理の違いによる糖度および酸含量に差は認められない(表2)。

### [成果の活用面・留意点]

1. 本処理における未着房枝とは摘房枝、寒害により幼果の無い枝、未着蕾枝の事であり、切返し処理は、写真1に示すように既に発生している新梢および今僅かに発生している新梢を切り取る処理である。
2. ビワ「BN21号」は、「長崎早生」より満開期が遅いことから、露地栽培では幼果が低温の影響を受けにくく、「長崎早生」より耐寒性(生存率)は高いが、幼果そのものの耐寒性は他のビワと同様であるため、植栽においては地域の気象状況を十分に考慮する必要がある。
3. 上部1/2摘蕾は花房の側軸(小果こう)が分離(写真2)してきたら実施し、処理が遅くならないように注意する。

[具体的データ]

表1 ビワ「BN21号」未着房枝の切返し時期と発生した新梢および幼果の生育状況

調査年度	切返し時期	着房率 <sup>z</sup> (%)	花房進度 <sup>y</sup>	未開花率 <sup>x</sup> (%)	幼果径 <sup>w</sup> (mm)	凍死果率 <sup>v</sup> (%)	枝長 (mm)	葉数 (枚)
2016	無処理	100.0 a	3.7 a	43.5 c	10.7 a <sup>u</sup>	19.3 a	14.4 b	16.0 a
	4月 25日	98.7 a	3.6 a	47.0 b	9.8 b	16.7 b	14.0 b	15.7 ab
	5月 25日	89.0 a	3.6 a	57.2 a	9.6 b	14.3 c	15.5 a	16.5 a
	6月 26日	25.0 b	3.6 a	58.8 a	9.8 b	15.0 c	14.7 b	14.9 b
2017	無処理	90.1 b	3.9 a	53.5 b	9.7 a	16.2 a	16.1 a	16.5 a
	5月 2日	96.2 a	3.8 a	51.0 b	9.4 a	16.7 a	15.6 a	16.2 a
	5月 15日	90.5 b	3.9 a	56.8 b	9.5 a	14.3 b	15.5 a	15.5 ab
	5月 31日	86.2 b	3.7 a	72.5 a	9.4 a	15.5 ab	14.1 ab	15.7 ab
	6月 15日	33.7 c	3.7 a	76.0 a	9.4 a	14.0 b	13.7 b	14.9 b

<sup>z</sup> 2016年11月2日各処理100枝程度調査、2017年11月6日各処理50枝程度調査

<sup>y</sup> 2016年11月2日、2017年11月6日調査、花房進度1:出蕾始期、2:穂軸分化期、3:穂軸分化期、4:摘蕾適期

<sup>x</sup> 2016年12月23日、2017年12月19日調査、1果房内における未開花割合の平均

<sup>w</sup> 2017年2月21日、2018年2月26日調査、各処理40果程度を実施

<sup>v</sup> 2017年2月21日、2018年2月26日、2017年2月21日調査、各処理40果程度を実施

<sup>u</sup> 縦の異なる文字間には、調査年度内においてTukeyの多重検定により5%の有意差有り

表2 ビワ「BN21号」の摘蕾方法の違いと寒害発生および果実品質

調査年度	摘蕾方法	凍死果率 <sup>z</sup> (%)	果実重 (g)	糖度 (brix)	酸含量 (g/100ml)
2016	上部1/2摘蕾	30.3 b	50.8 a	12.4 a	0.21 a <sup>y</sup>
	普通摘蕾	42.4 a	49.2 a	12.1 a	0.22 a
2017	上部1/2摘蕾	20.8 b	53.9 a	12.3 a	0.20 a
	普通摘蕾	47.1 a	52.2 a	12.0 a	0.21 a

<sup>z</sup> 2017年3月20日各処理50果実程度を調査、2018年3月23日各処理100果実程度を調査

<sup>y</sup> 縦の異なる文字間には、調査年度内においてTukeyの多重検定により5%の有意差有り



写真1 新梢先端の切返し方法  
(既に発生している新梢や新芽を全て剪除)

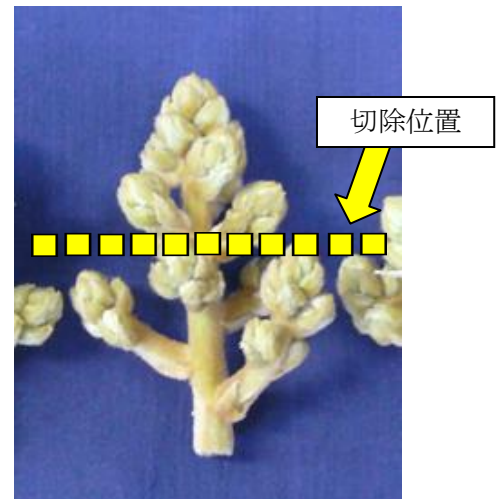


写真2 摘蕾適期(側軸分離し始め)の  
ビワ花房と上部1/2摘蕾実施図

[その他]

研究課題名 : ビワ供給拡大のための早生・耐病性ビワ新品種の開発および生育予測システムの構築

予算区分 : 国庫

研究期間 : 2014-2018年

研究担当者 : 松浦 正